

## ちえ遅れの幼児の治療教育過程の研究 (2)

### —Ⅲ 子どもにとっての衣服の意味—

研究第8部 津 守 真

P 363~368 昭49

#### 1. 出合い

5月4日

母親が「きょうは離れなくて」と云って、Kと共に庭に出てきたとき、私はKの目と出会った。Kはずっと私の傍によってきた。私は、そこにあった鉛筆の筒の中にじゃりをいれてのぞきこむと、Kものぞきこみ、じゃりをいれる。Kと私とのつきあいはそこから始まった。

(子どもとのつきあいの始まりにはいろいろあり、抱いたりおぶったりするところから始まる場合、いつのまにか遊びにまきこまれていくところから始まる場合などさまざまであるが、この例のように、目が一瞬合ったところから、ずっと近づいてくるというような場合もしばしばある。目を合わせればかならず人間関係が始まるとはかぎらず逆に相手をしりごみさせる場合もある。この事例では、目が合ったことは偶然であったが、このあと長い期間、私が見えるところにいるとKは安心して遊んでいるが、私が見えないところに移動すると、遊びをやめて私についてくるというような関係がつづいた。)

Kは私の手をひいて滑り台にゆくので、私もついてゆく。階段の曲ったところに、他から見えないかくれた空間がある。そこでKは私をみてにっこり笑う。

#### 2. Kの当面していた問題

5月11日

Kは、他の子どもが近寄ってくると逃げる。つみきを並べたりして遊んでいるときに、他の子どもがつみきに手を出したり、Kの手にさわったりすると、いらいらしたように立上り、大きな声でわめいて走りまわる。戸外で、他の子どもが走っていてKにぶかった。Kは地面

幼い子どもの生きた生活にふれて、その中での行動を見ていると、そこに、おとなにも共通な精神的行為の原初的なあらわれを認めることができる。ことばをもたない、あるいは、発達の未熟な子どもの場合にはとくに、身体的な動きによって、内面的な精神の動きを表出するよりほかないので、おとなもまた、子どもの生活の中に戻りあらわれる行動から、子どもの内面の動きをとらえるのである(注1)。子どももまた、日日、自分の当面している問題と取り組んで、子どもなりの努力をしている。ちえ遅れの子どももその例外ではない(注2)。その原始的な表現の中に、人間に共通の精神的行為の原型のあることに気付かされて驚くことがしばしばである。治療教育の面から見るときにも、表面にあらわれる行動の断片をこえて、子ども自身が問題としているもの(子どもがそれを意識しているか否かは別として)にふれることができるときに、治療教育が始まるのであると思う。

そのような観点からとり上げることのできる研究課題は数多くあるが、この小論では、私が、本研究所家庭指導グループにおいて7、8名のちえ遅れの子どものグループの中で、週に1日ずつ、1年間以上にわたってつき合うことの多かったKの保育事例から、K自身が格闘していたと思われる衣服をめぐる問題——社会文化的規準への反抗の問題——をとり上げて考察する。

注1 津守真「保育研究転回の過程」津守、本田、松井「人間現象としての保育研究」光生館 昭49 P 3~28

注2 津守真編「知恵遅れの幼児の教育」慶応通信 昭49

津守真「過程としての時間——1盲幼児の遊びはじめるまで——」日本総合愛育研究所紀要第10集

にしやがみ、砂をつかんで、はげしく自分の頭に砂をかけ、それから声を出して地面に頭を打ちつける。私がKを肩にのせて歩きまわると次第に落着き、また、何かをしはじめる。

室内で、クレヨンで画用紙にKがかいたえを切り抜いてやると、さもうれしそうな顔をし、手にもってじっとながめる。切り抜いていたのを持って歩いていたときに、私が手にもっていたつみぎを、うっかり、Kの足の上におとした。とたんにKは手に持っていた切り抜いたえを、しわくしゃにして投げすてる。午後になって、また切り抜いたえをもってトランポリンにのっていたとき、他の子どもがのってきた。するとKは、その切り抜きをくしゃくしゃにして投げすてた。そして、走って戸外にゆき、顔を土にぶちつける。私はKを肩にのせて歩くと、気分がおさまり遊びはじめる。

このころはこういうことが多くあった。家ではKが頭を打ちつけるために壁がくずれているところがあるという。この日の例のように、友だちがぶつかったというような理由のあるときもあるが、外から見える理由のないときもある。自分が気に入ってかいて、だいじに持って歩いていたえを、突然、くしゃくしゃにまるめてふみつぶすこともある。

これは自分ではよくできたと思い、満足してやったものを、次の瞬間に、ほんのわずかのきっかけで、自分で破壊し、否定し、ふみつけてめっちゃめっちゃにする行動である。人が自分ではよくできたと思うことの価値を、他人から認められず、常にけなされていたら、自分で作ったものが客観的存在価値をもちえない。そのような場合最初は自分で高く評価しても、自らその評価を否定する行動をすることになるだろう。それに伴う感情の変化は急激であり、ほんのわずかなきっかけによって、反対の極へと移行する。ちえ遅れの子どもの場合に、年令の割に、することが幼稚であり、子ども自身は自分のしていることに価値を認め、満足している場合にも、母親はそれを程度の低いことと思い、十分にそれをやらせておくことができない。

Kは頭を壁に打ちつけ、地面に打ちつけて声を出す。自分のしていることが中断され、うまくいかないときである。他人に向ってこうにも、精神的にも身体的にも力のつよい大人の間にはさまれて、どうしようもなく、壁に頭を打ちつけるより他ないのであろう。そのときの子どもは、精神的に苦痛であるに違いない。そのことは頭を打ちつけて泣きわめくときに傍にいてよくわかることである。その時にKを抱き上げて肩車をして歩いていると感情の出口がみつき次第に気持が落着いてくる。

母親と話をしていると、Kの母親にはたくさんの心配があり、神経質である。壁に頭を打ちつけるようなときには、大きな声で叱ってやめさせようとする。私共と話をするときには、教養もあり、理性的であり、子どもの扱い方についてとくに異常であるようには思われない。けれども、子どもの側からみるならば、四面壁に囲まれているように思えるので、このような行動をするのであろう。どこかに出口を求めようとするエネルギーがあって、出口を見出せず、とり囲む壁に頭を打ちつけて探り求めるより他ないのである。ぶつけられる壁は、ちえ遅れの子どもには、どうすることもできないおとなの課する社会文化的要請の壁であるのに対して、ぶつかるエネルギーは、子どもの内にあるので、伸びようとするが形をとらない、混沌のままの生命過程である。

Kは、やがて、このおとなの社会文化的要請の壁に対して、自ら、積極的に反抗しようとする。それは「衣服」への反抗を通してである。

### 3. 衣服への反抗

5月18日

朝、Kといっしょに、庭のはしまで走ってもどつてくことを何度か繰り返す。Kは私の後から走ってきて、私に追いつき、足がからまってころんだ。顔に擦傷ができるほどであった。Kはいつものように、地面に頭を打ちつけようとして止めて、すぐわきの草むらに顔をうずめた。それだけで、じきにまた追いかけてこを始めた。

この日、Kは、物を庭と外の塀の柵の外側に投げ捨てる。それはKの好きなものが多く、たとえば、前回のとき、家に持って帰るほど好きだった、きりんのぬいぐるみなどを、柵の外に投げる。

物をトイレの便器の中に入れる。気に入った風車を買つくと、すぐにトイレにもって行って捨てた。母親のはなしによると、家でも、母のだいじにしている物や、Kの好きな物を、トイレの便器の中にするとのことである。

この日も、自分でかいたえを切り抜いてくれと私に示し、切り抜くとよるこんで、うれしそうに笑う。しばらくすると、これをくしゃくしゃにして床にすて、ふみつける。傍にいても、外的な理由は見出せない。

物を戸外の柵の外に捨てたり、トイレの便器の中に入れてるときには、おとなの顔をみながらやることが多い。おとなを困らせようというような表情が見られる。戸外の柵の外に捨てるというのは、自分の領分から外に閉め出すことであり、その点からいうならば、自分の好きなものに対する否定的な感情を示すものである。しかし、

おとなを困らせようとする感情が出てきた点で、頭を壁にはげしく打ちつける行動とは異っている。また、トイレの便器の中に水びたしにすること、柵の外に捨てること、ともに、自分の意識的な行動の場から外に閉め出すという点で共通である。これらの行動は、これからしばらく続くが、更に次の「衣服」への反逆への過渡的な行動とも云えると思う。

5月25日

朝、私と走っている間に、何回か他の子どもにもぶつかり、頭を地面に打ちつけるので、隣接した公園につれてゆく。公園には水の流れがある。Kは私のはいていたサンダルをどって、水の流れに投げる。自分の運動靴も投げて水に入れる。その運動靴に水をいれたり出したりして遊び始める。

かなりの時間、遊んでから帰ってくると、母親が入口で私共を見つけ、「Kちゃん、くつは？」とたずねる。私がKの運動靴を見せると、「あら、そうかしら、色が違うけど」というので、水に濡れたことを説明する。Kの母はしきりに靴を調べていたが、私はKと室内に入り食事に加わった。Kは食事をあまりたべないでうろうろしはじめ、画用紙を出してかき始める。かき終るとすぐにくしゃくしゃにする。何枚もかくが、かき終るとすぐにどれもなくしゃくしゃにする。

帰るときに、Kの母は、新しいきれいな靴を持っている。新しい靴を買いにいったのである。これからしばらくの間、Kは靴をぬいで庭を走りたがるが、Kの母は、Kが靴をはいていないのを見ると追いかけて、靴をはかせようとする。Kは、靴をはかされてもすぐにぬいでしまい、放り投げて走り出す。

6月1日

この日も庭で走ったりしていると、他の子どもとぶつかり、わめきそうになるので、公園にゆく。水の流れのところで、Kはくつとくつ下をぬいで、水に入る。そのうちには水の中に腹ばいになり上衣がぬれた。Kはすぐに立上り、上衣をぬぎ、パンツもぬぐ。私は一瞬ためらったが、Kは喜んでとびはね、あそぶので、そのままにしておく。

かなりの時間、水の中で遊んで昼食の時間になったので、私は連れ帰らねばと思い、声をかけて、体をふき、パンツをはかせようとしたが、すぐに反抗する。足をつっぱるのをむりにはかせようと試みた。すると、地面に頭を打ちつけようとするので、私ははかせるのをやめてKを抱くと、Kは私にかみつこうとする。そのときのKの表情はけわしく、いつもとは人相が変わったようにみえた。私はKを抱いて、しばらく静かにしていたがKには

私を避けるそぶりすら見られ再び信頼がかけられるかどうか、危ぶむほどであった。私は、「Kちゃん、先生がむりにしたのはわるかったから、また、水に入っていないよ」とあやまって、再びKが遊び始めるのを待った。

そのあと、Kは、私の持っているパンツとシャツと上衣をどって、水のところに持ってゆき、水につける。それを拾い上げて一寸じぼり、私のところにもってくる。Kは、うれしそうな表情になり、5～6度それをくり返し、自分で手すりに干す。靴も水につける。ひとしきり遊んで後、私の膝に坐り、私の目をさわって、メ、足をさわって、アシと云ったり、何か口の中でいろいろ云っている。そして、裸のまま、帰ってくる。

この日のKとのやりとりから裸になることについて、私はいろいろと考えさせられた。この日、裸で水の流れて遊ぶKを見て、そのわきの橋の上を通る人々の反応にはさまざまなものがあった。

- ・幼稚園の遠足の子どもの行列が通る。ウワーという声が発せられる。先生がジロリと見てゆく。
- ・えをかきにきた小学生の行列が通る。クスクス笑ったり、ワーという声がする。
- ・若い男子の大学生が通る。「ほほう、やっとな」と云って過ぎる。
- ・頭のはげた中年過ぎの男が通る。「やっとな」と云って、一寸立ち止る。
- ・2、3才の子どもをつれた若い母親が通る。へんな目つきで見て、子どもの手をにぎったまま、目をそらして、急いで通る。このような母親は何人も通る。子どもたちは、Kの方をふりがえりながら、手をひかれてゆきすぎるが、その子どもたちの手足は何とも白くて細い。
- ・近所の保育園の子どもたちがくる。先生は水の中を歩かせながら、「スカートがぬれてもいいんですよ」と声をかけている。Kは、その子どもたちにまじって歩きまわり、木の実を水の中に投げたりして、短い時間であるが、一段と面白く遊んだ。この幼児たちは、Kの裸に対して、好奇の目をもって見るものもない。あたりまえのようにして、木の実をいっしょに投げて遊ぶ。

このようにさまざまな反応があるので、Kが裸になったときには、そうさせるかどうかには、ためらいがあるし、裸で遊ぶときにいつもとは違った自由な動きがあるのを見た後にも、つれて帰るときには、衣服を着せようとする試みをする。その試みをするときには、もしかしたら、すぐに着るかもしれないという期待を持つことができるわけだから、その試みをするのは自然なことであ

ろう。ところが、衣服を着せようとする試みに、これほどまでの激しい反抗を示したとき、それは、単に衣服を着るということではなくて、彼にとってはそれ以上の意味があるのだらうと考えざるをえない。Kはその衣服を水につけ、水に沈める。それほどまでに、衣服を否定しなければならぬということも、彼にとって、衣服が特別の意味をもつことを示すものであろう。

6月8日

母親の話によると、昨日は、風呂桶の水の中に、衣服や人形をいれてあったとのことである。また、トイレの便器の中に、衣服類をいれてあったとのことである。母親は「おしりを叩いておしおきをしたんです」という。

この日は雨降り、全員室内にいたが、Kはその中にまじって、ひとり遊びで遊んでいることが多かった。

6月15日

この日は、何度も自分からシャツとずぼんを脱ぎ、脱いだ衣服を水道の水につけた。

(こういうことが数週間つづく。)

6月28日

庭にだれもいなくなつたとき、Kは急に庭にゆき、砂場の水たまりでずぼんを脱ぎ、泥水につける。

まもなく、自分から部屋に入ってきたので、別のパンツを出すと、自分からはこうしてシャツも着る。(自分から素直に着ることは珍らしい)

7月6日

ままごと茶碗を並べ、大つみきで囲み、いろいろの人形や自動車を設置して私をよび、ごはんを食べさせる動作などをして、私を相手にしてひとり遊びで遊んだ。(近來にない充実したあそびである)他の子どもがきて、ぶつかったり、くずしたりしても、ほとんど怒らないことが多かった。何度も庭に出るが、一度も靴をぬごうとしない。おとなのスリッパや靴をぬがせるが、捨てにゆかない。

7月13日

砂場でパンツをぬいで、柵の外にすてにゆく。それを拾ってきて、砂場の泥水の中につける。じきに自分から部屋に入ったので、パンツを出してはかせると、すぐにはく。このところ、明らかに、衣服を着せるときの反抗が少なくなり、円滑に着せることが、できるようになった。

また、この1、2週間とくに、にこにこうれしそうに近寄ってきて、その表情が和らいできた。

夏休み中、Kの母親はプールの回数券を買って、毎日のように、Kをプールにつれていった。

9月14日

久しぶりにKに会った。Kは、くるとすぐに私のところにきて抱きついた。そのあと、ひとりでつみきで遊んでいた。他の子どもがぶつかっても怒らない。

母親は、自分からいろいろと話す。「普通の子どものみると、小さいのになまいきにみえて、この子は宝みたいなものだと思います。」「Kがかんしゃくを起したとき、あるときまで叱っていたが、それはよいことではないと分りました。それから、Kが私のところにくれば、抱きしめて慰めてやることにしました。Kも私のところにいけば慰めてもらえること分ってから、よく私のところにくるし、落ち着いてきたように思います。」「Kはとてもやさしい繊細な気持をもっているんです。なまいきな子どもには見られない子どもらしさです。それをつぶしてはならないと思います」母親がこのように話すのは、母親の側にも、変化が生じてきたと見ることができよう。

9月21日

庭に出るときに、サンダルをはく。脱げると、わざわざ引き返してはく。水たまりがあっても、パンツを脱がない。靴を水につけない。部屋に入るとき、私がスリッパをはくと、Kもスリッパをはく。

こうして、衣服に反抗を示す行動は、数ヶ月続いた後に終結に至った。それとともに、Kの行動は全体にやわらかくなり、地面や壁に頭を打ちつける行動はほとんど見られなくなり、また、自分で描いたものを、直後にくしゃくしゃにすることもなくなった。

この後、Kは、いままで外に対する反抗の面があらわれていたのに対して、内側の世界に目を向けるようになる。それは薄暗い部屋の中への関心という形であられるのであるが、ここでは、次の時期への変化を指摘しておくにとどめる。

ここで、Kの衣服への反抗の経過を見直してみると、自分の作ったものを否定すること、壁や地面に頭を打ちつけること。好きなものを柵の外に捨てることなどと、一連の経過の中にあらわれている。すでに述べてきたように、いずれも、おとなの社会文化的要請と関連していることがらであり、衣服への反抗は、おとなの社会文化的要請への反抗として見られるであろう。それが何故、とくに、衣服への反抗としてあらわれるのであろうか。それは、衣服が社会文化的要請を象徴するものとしての意味をになっているからと考えられよう。Kの事例は、このことを極端な形で、浮きぼりにしてくれたのであるが、これはKのみに特殊なことではない。Kの事例は、ふだんは、明確に意識されていなかった衣服のもつ精神的な意味を考えさせてくれたように思う。そして気が付いてみると、昔から、衣服のもつ魔力を取扱った民話や

童話も数多くある。そこで次に、衣服の意味についての一般的考察を試みたい。

#### 4. 象徴としての衣服

衣服のもつ象徴的意味を考えるときに、まず私が思い起すのは、19世紀の英国の思想家カーライルの「衣服哲学サーター・レザータス (Sator Resartus)」である。新渡戸稲造の抄訳(注3)があるが、これは、彼が一高の校長になったときに行った連続講演で、彼自身、30日以上もこの書物を読んで大きな影響をうけたと云われる。これは、3部にわたって衣服から人間について考察したもので、衣服と真正面から取り組んだ哲学書である。このような哲学書が出るということからも、衣服が人間の本質の一部をなしていることが分る。その中で、彼はしばしば、サンクロティスム (Sansculottism) (ずぼんをはかない世界、無禪主義) という語を用いている。衣服をつけない裸の世界に、物の本質があらわれ、物事の真実にふれることができるという意味である。世の中の制度とか習慣とかを捨てて、人間の真情にふれるには、衣服を着けていてはだめだということを云っている。もちろん、これは、今日云うところのヌーディズムを奨励しているのではない。衣服が人間に対してもつ意味を自覚することの必要を云っているのである。「衣服を着けた世界」という章の中で、軍人も、巡査も、僧侶も、役人も、皆一種の衣服ではないか、文明社会は衣服の変形とも云えるのではないかと述べて、衣服はすなわち社会文化である、と云っている彼は云う。「もしも皇帝の金釧が急に消え、羊の毛織物が夢のように消えてしまったらどうなるだろうか。そうして急にみんな裸になったら、一番近いかくれ場にもぐりこむのではないか。そうしたら、すべての政府の組織も、立法も、財産も、警察も、文明社会もみな消えてしまうのではないか。これらは皆衣服の変形ではないか。」(注4)

「衣服はわれわれに、個性と、特異性と、社会的礼儀とを与えてくれた。衣服がわれわれを、人間にしてくれた。しかし同時に、衣服がわれわれの内実を蔽いかくそうと脅威を与えている。(衣服がわれわれを蔽うてしまつて、魂はなくなって、衣服ばかりにしてしまうのがおそろしい)」と。(注5)

更に、「衣服を脱いだ世界」という章の中で、人間から衣服をとり去ったときに、はじめて、人間は「一個の精神的存在 (a spirit)」であり、神秘の中でも言葉に云いつくせない神秘なもの (unutterable Mystery of Mysteries) であることを悟る偉大さに達するという。彼の言をかりれば、「衣服を透して人間そのものを見る

ことができる者は幸いである。」(注6)

ここにみるように、カーライルによれば、衣服は文明社会の象徴であり、衣服をとり去ったところに人間の本質があらわれる。

心理学で用いるパーソナリティという語は、ラテン語のペルソナから来た語であり、これは古典劇で用いられる役者の仮面を指す語であることはよく知られている。すなわち、生きた人間が、社会との間にかえてゆく、仮面がペルソナであり、外的世界に対する適応のことである。それがうまくいかないと社会的不適応を起す。仮面は人が身につけるものであり、衣服の一種と云ってもよいであろう。逆にいうならば、社会との間でどのような適応、調和の関係を保っているかは、衣服にあらわれるとも云えよう。もちろん、現実生活の中ではいろいろの要因がはたらくから、その関係は、単に図式的直線的に考えられないことはいうまでもない。夢の中にあらわれる衣服は、さらに象徴的意味を多くもっていると考えられる。夢の中で、衣服を着けていなかったり、他人の衣服を間違えて着たり、衣服を汚さないように細心の注意を払ったりなど、衣服が出てくるときには、その人が社会的適応の問題を多くかかえている時であることは、多くの人が普通に体験するところである。

昔から伝わっている民話や童話の中にも、衣服がパーソナリティの社会文化的側面を象徴していることを示すものがいろいろある(注7)。他人の衣服を着ることによって変装して何かをなしとげる話(アイルランド)、王様と衣服をかえることによって王になる話(中国) 主人と召使と衣服を交換することによって、地位も交換する話(ロシア) 王様と泥棒が衣服を交換する話(印度) 王女と下女が衣服を交換する話(イタリア) などでは、衣服は社会的地位や役割と等価になっている。また、衣服が自分自身の自己同一性を示す物語もある。愚か者が新しい衣服を着るのは、自分自身を知らない者の愚行であるという話(欧州) 衣服をかえることによって変身する話(アイスランド、北米インディアン、アイルランド、エスキモー、フランス系カナダ)、上衣によって身元証明とする話(イギリス、イタリア、アフリカ) などである。そのような衣服が、自分の身体にくっついて離れなくなる話もある(欧州)。それをひき離すという試験を課せられる話もある(アイスランド)。社会的役割とは別に自分自身があることが分らなくなるほどに、両者が混同している状態をいうものであろう。このような資料をあげてゆけば、いくらでもこれに付加してゆくことができるであろう(注8)。

ユングの主著の一つである「心理学と錬金術」の中で

彼は1人の男性の数日の夢を考察しているが、その最初の夢は、社交の場に出て、帰るときに自分の帽子を間違えてかぶるといふ夢である(注9)。帽子は頭のまわりを蔽うものであり、人間の全体を象徴し、観念の内容を象徴する。他人の帽子をかぶるときには、自分に似つかわしくない違和感と困惑があるであろう。ことに帽子は、多くの人の目につきやすく、その困惑は、社会的な色彩を帯びるであろう。ユングは他人の帽子をかぶるといふのは、その人にとって未知の体験、すなわち無意識に出会うことであるとみる。そこから人格の統合がはじまる過程が、この後につづく夢によって示される。ここでは、社会との間の適応の問題にとどまらず、むしろ、自分自身に対する適応の問題が中心となってきている。

ここに見たように、衣服を社会文化の象徴としてみている資料は数多くあり、衣服は人間にとって精神的意味をもつものである。とするならば、衣服には人間のさまざまな感情がまつわりついており、極端な場合には、衣服を水につけたり、破き捨てて去ってしまうことも出てくる。これは、そこに伴うその人の感情の問題でもあり、その人が取り組まされている問題のあらわれとも見ることができよう。また子どもが衣服を脱ぎ捨てる際には、社会文化的規制を離れて、素朴な人間として振舞い、対等な人間としての交りを求めているという見方をすることができよう。

注3 新渡戸稲造 衣服哲学講義、新渡戸稲造全集第9巻 昭44

Thomas Carlyle: Sator Resartus 1833

注4 op. cit. p. 84

注5 op. cit. p. 57

注6 op. cit. p. 86

注7 Thompson, Stith: Motif-Index of Folk-Literature Indiana Univ. Press. 1966

注8 衣服にも、帽子から上衣、靴にいたるまでいろいろあり、それぞれ意味を異にするものである。靴については、幼児の観察研究の中で私が考察した小論がある。

津守真、幼児の観察研究「幼児と靴」幼児の教育 72巻3号P64~72

子どもは靴に強い関心をもつものであり、シンデレラの物語の中で、子どもが最も惹かれる場面の一つは、靴が脱げる場面である。靴は、その人でなければはくことができない、人格そのものをあらわすものである。千里をとぶバガサスのように、能力をあらわす場合もある。また日本においてはとくに、靴をはく場所と脱ぐ場所には厳格な区別があり、靴

は外出をも意味する。子どもは、歩き始めたころから、はだして戸外に出ると、親は靴をもって追いかける。靴は子どもにとって、社会的規制をも代表するようになる。

注9 Jung, C.G.: Psychologie und Alchemie 1943

## 5. 結び

子どもが衣服を脱いで着ようとしないうちに、靴をはかないで、その靴を水の中につけると、そこに立ち会うおとなは困惑するが、それは子どもにとってはどのような意味をもつのであるかを問題とした。そして、Kの保育の経過の中で、Kの衣服をめぐる行動は精神的意味をもつ行為の表現であるという見方に立って考察した。

Kの事例に見たように、知恵おくれの子どもの場合には、親やおとなの側に、何とかして、普通並みに追いつかせよう。社会に適応させようとする気持ちが強くはたらく。それだから、親は子どもに人並みの服装をさせたいと思うし、衣服や靴を脱ごうとすれば、無理にでもそれを着せることになる。そのことで子どもと悶着を起しはじめると、子どもと対等に遊ぶことができなくなってしまふ。子どもの側からみるならば、おとなと人間の感情を共に分かち合いたいときに、おとなが社会的側面からだけしか見ない場合には、その社会的規準—衣服—に対して反抗を示すことになる。子どもは衣服を脱ぎ捨てて衣服を水の中に沈めて、裸の自分自身になるとびまわる。人間としての存在感を共にするところから出発することを求めているのである。そこから出発して、子どもが自分から社会に入ってゆこうとするとき子どもは再び自分から衣服を着るようになる。これがKの辿った経過であった。

これは一例の事例経過であるが、ちえ遅れの幼児の保育の実際には、衣服について、ここに述べたのと類似の場面に多くぶつかる。そのようなとき、衣服を基本的な生活習慣のしつけの観点からだけ考えるのでは不十分であって、子どもにとっての精神的意味を考える必要がある。Kの事例はこのことを際立った形で示してくれたものである。

Kの衣服に関する行動は、その直接的な身体行動表現によって、衣服に象徴される精神的行為の原型を明らかにしてくれたものであると思う。